DIALOG(R) File 351: Derwent WPI

(c) 2000 Derwent Info Ltd. All rts. reserv.

007460883

WPI Acc No: 1988-094817/198814

Arachidonic acid prepn. - by culturing Mortierella microbe showing arachidonic acid productivity, and recovering the acid from microbial body

Patent Assignee: SUNTORY LTD (SUNR)
Inventor: SHIMIZU S; SHINMEN Y; YAMADA H

Number of Countries: 016 Number of Patents: 009

Patent Family:

	conc ramary	•						
Pat	ent No	Kind	Date	Applicat No	Kind	Date	Week	
JP	63044891	Α	19880225	JP 8715920	A	19870128	198814	В
ΕP	276541	A	19880803	EP 87308690	A	19870930	198831	
ΕP	276541	B1	19930324	EP 87308690	Α	19870930	199312	
US	5204250	Α	19930420	US 8722820	A	19870306	199317	
				US 90588473	A	19900926		
DE	3785023	G	19930429	DE 3785023	Α	19870930	199318	
				EP 87308690	Α	19870930		
ES	2039451	Т3	19931001	EP 87308690	A	19870930	199344	
JP	95034752	B2	19950419	JP 8715920	Α	19870128	199520	
ΕP	276541	B2	19980826	EP 87308690	A	19870930	199838	
CA	1340433	С	19990316	CA 531638	Α	19870310	199929	

Priority Applications (No Type Date): JP 8671270 A 19860331; JP 8715920 A 19870128

Cited Patents: 5.Jnl.Ref; A3...8930; EP 155420; EP 207475; EP 223960; JP 52064484; JP 59130191; JP 61177990; No-SR.Pub; JP 6177990

Patent Details:

Patent No Kind Lan Pg Main IPC Filing Notes

JP 63044891 A 7

EP 276541 A E

Designated States (Regional): AT BE CH DE ES FR GB GR IT LI LU NL SE

EP 276541 B1 E 9 C12P-007/64

Designated States (Regional): AT BE CH DE ES FR GB GR IT LI LU NL SE

US 5204250 A 5 C12P-007/64 Cont of application US 8722820 DE 3785023 G C12P-007/64 Based on patent EP 276541

DE 3785023 G C12P-007/64 Based on patent EP 276541 ES 2039451 T3 C12P-007/64 Based on patent EP 276541

JP 95034752 B2 5 C12P-007/64 Based on patent JP 63044891

EP 276541 B2 E C12P-007/64

Designated States (Regional): AT BE CH DE ES FR GB GR IT LI LU NL SE

CA 1340433 C C12P-007/64

Abstract (Basic): JP 63044891 A

Method comprises (a) culturing the microbe which belongs to Mortierella and shows the productivity for arachidonic acid, for forming arachidonic acid or the lipid contg. arachidonic acid and (b) recovering arachidonic acid from microbial body.

Pref. M. elongata IFO 8570, M. exigua IFO 8571, M. hygrophila IFO 5941, etc. can also be used. As carbon source glucose, fructose, soluble starch, molasses, etc. can be used and as nitrogen source peptone, yeast, malt or beef-extract, csl, etc. can be used. For increasing the yield of arachidonic acid it is pref. to add hydrocarbon (e.g. hexa or octadecane, etc.), fatty acid (e.g. oleic- or linlic-acid, etc.), its salt or oil and fat (e.g. olive-, cotton seed-or coconut-oil, etc.) in culture medium before or during fermentation continuously or intermittently.

USE/ADVANTAGE - Microbes belonging to Penicillium, Aspergillus, etc. can produce arachidonic acid, but the productivity for arachidonic acid of the microbe belonging to Mortierella has not been known.

Mortierella elongata SAM 0219 (FERM P-1239) is sepd. from soil and by using it arachidonic acid can be prepd. with high yield using

1-34-52

inexpensive culture medium in a short fermenting time.

Dwg.0/0

Abstract (Equivalent): EP 276541 B

A process for production of arachidonic acid, comprising culutring a microorganism, belonging to the genus Mortierella and capable of producing arachidonic acid, to produce arachidonic acid or a lipid comprising arachidonic acid, and recovering the arachidonic acid, wherein the culturing is carried out in the presence of a hydrocarbon, fatty acid or a salt thereof, or a combination thereof.

(Dwg. 0/0) Abstract (Equivalent): US 5204250 A

Prodn. of arachidonic acid or a lipid contg. arachidonic acid comprises propagation of Mortierella elongata IFO 8570 or SAM-0219 (FERM BP-1239), M. exigua IFO 8571 or M. hygrophila IFO 5941 in the presence of the usual nutrients and one or more precursors, e.g. n-hexadecane, n-octadecane, oleic acid salts, linolenic acid salt, linoleic acid salts, olive oil, corn oil, coconut oil, soyabean oil and linseed oil; then recovery of the arachidonic acid or its lipid cpd. from the medium. ADVANTAGE - The process is more rapid than previous fermentation methods and gives improved yields.

(Dwg.0/0)
Derwent Class: B05; D16; E17
International Patent Class (Main): C12P-007/64
International Patent Class (Additional): C12N-001/38; C12P-001/02; C12P-007/40; C12R-001/64; C12P-007/64; C12R-001-645

1 Select Statement(s), 2 Search Term(s)

Serial#TD430

?exs
Executing TD430

?map anpryy temp s10

2 AN=JP 8671270 2 AN=JP 8715920

S11 2 AN=JP 8671270 + AN=JP 8715920

?s s11 not s10

2 S11 1 S10

S12 1 S11 NOT S10

?t 12/7

(19)日本国特許庁(JP)

(12) 特許 **苭**(B2) 公

7432-4B

(11)特許出願公告番号

特公平7-34752

(24) (44)公告日 平成7年(1995)4月19日

(51) Int.Cl.5

識別記号

庁内整理番号 FΙ 技術表示箇所

C12P 7/64

// (C12P 7/64

C12R 1:645)

発明の数2(全 5 頁)

(21)出願番号

特願昭62-15920

(22)出願日

昭和62年(1987) 1 月28日

(65)公開番号

特開昭63-44891

(43)公開日

昭和63年(1988) 2月25日

(31)優先権主張番号

特顧昭61-71270 昭61 (1986) 3 月31日

(32)優先日 (33)優先権主張国

日本(JP)

特許法第30条第1項適用申請有り 日本農芸化学会 昭 和61年度大会講演要旨集 昭和61年3月10日 社団法人

日本農芸化学会発行 第502ページに発表

微生物の受託番号 FERM BP-1239

(71)出願人 999999999

サントリー株式会社

大阪府大阪市北区堂島浜2丁目1番40号

(72)発明者 新免 芳史

京都府乙訓郡大山崎町円明寺鳥居前8の1

S - 304

(72)発明者 山田 秀明

京都府京都市左京区松ヶ崎木ノ本町19-1

(72)発明者 清水 昌

京都府京都市中京区西の京伯楽町14

(74)代理人 弁理士 青木 朗 (外5名)

審査官 谷口 博

(54) 【発明の名称】 アラキドン酸及びこれを含有する脂質の製造方法

【特許請求の範囲】

【請求項1】モルティエレラ (Morticrella) 属に属し アラキドン酸生産能を有する微生物を培養してアラキド ン酸、又はアラキドン酸を含有する脂質を生成せしめ、 そしてアラキドン酸を採取することを特徴とするアラキ ドン酸の製造方法。

【請求項2】培養開始前の培地に炭化水素、脂肪酸もし くは脂肪酸塩、または油脂を添加することを特徴とする 特許請求の範囲第1項記載の方法。

【請求項3】培養中の培養液に脂肪酸もしくは脂肪酸 塩、または油脂を添加することを特徴とする特許請求の 範囲第1項記載の方法。

【請求項4】モルティエレラ (Mortierella) 瓜に属し アラキドン酸生産能を有する微生物を培養してアラキド ン酸を含有する脂質を採取することを特徴とするアラキ ドン酸を含有する脂質の製造方法。

【請求項5】培養開始前の培地に炭化水素、脂肪酸もし くは脂肪酸塩、または油脂を添加することを特徴とする 特許請求の範囲第4項記載の方法。

【請求項6】培養中の培養液に脂肪酸もしくは脂肪酸 塩、または油脂を添加することを特徴ととする特許請求 の範囲第4項記載の方法。

【発明の詳細な説明】

10. [産業上の利用分野]

本発明は配管法によるアラキドン酸及びこれを含有する 脂質の製造方法に関する。

【従来の技術】

従来から、微生物によるアラキドン酸の生産方法として は、炭素源として、炭水化物、又は炭化水素を用い、微 生物として、ペニシリューム (Penicillium) 属、アス

ペルギルス (Aspergillus) 凮、ロードトルラ (Rhodoto rula) 瓜、又はフザリューム (Fusarium) 瓜に瓜する微 生物を使用する方法が報告されている(特公昭56-1923 1,56-19232,56-19233を参照のこと)。

しかしながら、いずれの方法においても収量が低く、ま たは培養時間が長く、あるいは、工程が複雑である。 また、モルティエレラ(Mortierella)属の微生物を川 いるアラキドン酸の製造方法は知られていない。

[発明が解決しようとする問題点]

本発明は、従来アラキドン酸を生産する能力を有するこ 10 とが知られていなかったモルティエレラ属微生物を使用 して、安価な常用の培地を用いて、従来法より短い培養 時間で、高収率で、しかも単純な工程でアラキドン酸及 びこれを含有する脂質を製造することができる方法を提 供しようとするものである。

[問題点を解決するための手段]

上記の目的はモルティエレラ属に属してアラキドン酸生 産能を有する微生物を培養液してアラキドン酸、又はア ラキドン酸を含有する脂質を生成せしめ、そしてアラキ ドン酸を採取することを特徴とするアラキドン酸の製造 20 方法: 及びモルティエレラ属に属しアラキドン酸生産能 を有する微生物を培養してアラキドン酸を含有する脂質 を採取することを特徴とするアラキドン酸を含有する脂 質の製造方法により達成される。

[具体的な説明]

本発明においては、モルティエレラ風に属し、アラキド ン酸生産能を有する微生物であれば、すべて使用するこ とができる。このような微生物として、例えばモルティ エレラ・エロンガタ (Mortierella elongata) IFO 857 0、モルティエレラ・エキシグア (Mortierella exigu a) IFO 8571、モルティエレラ・ヒグロフィラ (Mortier ella hygrophila) IFO 5941等を挙げることができる。 これらの菌株はいずれも、財団法人が静研究所からなん ら制限なく入手することができる。

また、本発明者らが土壌から分離した菌株モルティエチ レラ・エロンガタSAM 0219 (微工研条寄第1239号) を使 用することもできる。

次に、上記の菌株SAM 0219(微工研条寄第1239号)の菌 学的性質を記載する。

各培地における生育状態

培養条件:25℃、暗黒下

1. 麦芽エキス寒天培地

コロニーの生育は良好、培養2日日のコロニーは直径28 -31mm、培養5日日のコロニーは直径65-72mm、コロニ 一は浅裂状を呈する、気菌系の発達は乏しい、胞子のう 胞子の形成は良好、胞子のう栖は気菌系より生じる、ニ ンニクに類似した臭いあり。

2. バレイショ・ブドウ糖寒天培地

コロニーの生育は良好、培養2月日のコロニーは直径27

ーはバラの花状を呈する、コロニー中心部で気菌糸が著 しく発達する、コロニーの裏側は黄白色あるいは黄色、 胞子のう胞子の形成は不良、ニンニクに類似した臭いあ り、臭いはやや強い。

3. ツァペック寒天培地

コロニーの生育は比較的良好、培養2日目のコロニーの 直径は22-24mm、培養5月目のコロニーの直径は50-53 mm、気菌糸の発達は乏しい、気菌糸が密にからまりあう ことがある。胞子のう胞子の形成は非常に良好、胞子の う柄は気菌糸より生じる。ニンニクに類似した臭いあ

4. LCA寒天培地(培地の調製方法は、三浦宏一郎、工藤 光代著"水生不完全菌のための一寒天培地"日本菌学会 会報11巻、116-118頁、1970年に従った)

コロニーの生育は良好、培養2日目のコロニーの直径は 27-29mm、培養5日目のコロニーは直径64-66mm、コロ ニーは浅裂状を呈する、気菌糸の発達はコロニーの中心 部を除いて乏しい、胞子のう胞子の形成は良好。胞子の う柄は気菌糸より生じる。ニンニクに類似した臭いあ り。

検鏡観察

各培地の検鏡標本およびコロニーの直接検鏡で、胞子の う柄、胞子のう柄の分岐の仕方、胞子のう、胞子のう胞 子などを観察した。

胞子のう柄は長さ87.5-320μm、幅は基部で3-7.5μ m、先端に向けて先細り、1.0-2.5μmとなる。 胞子の う柄はしばしば基部で分岐する。胞子のうは球形、直径 15-30μm、内部に多数の胞子のう胞子を含む、離脱後 やや不明瞭なカラーを残す。胞子のう胞子は楕円形、希 30 に腎臓形、表面は平滑、7.5-12.5×5-7.5 μm、厚膜 胞子は比較的多数形成される。単独、希に連鎖すること がある。時に数本の菌糸を周囲に出すことがある。楕円 形また亜球形、12.5-30×7.5-15μm。または直径12. 5-15 µ m。接合胞子は観察されない。

3. 生理的性質

最適生育条件

pll:6-9

温度:20-30℃ "

生育の範囲

40 pll:4-10

温度:5-40℃

以上の菌学的諸性質に従い本発明の菌株(SAM-0219) の分類学的位置の検索を、J.A. von Arx, "The Genera o f Fungi sporulating in Pure Culture, "3rd ed., J. Cra mer, 1981およびK. H. Domsch, W. Gams, & T. -H. Anderson, "Compendium of Soil Fungi, "Academic Press. 1980/2 準拠して求めると、胞子のう柄の先端に球状の胞子のう を形成する、柱軸を持たない、胞子のう胞子に付属系が ない、培養菌糸がニンニクに類似した臭いを発する、と -31mm、培養5日目のコロニーは直径75-80mm、コロニ 50 いうことから本菌株はMortierelia属に属する真菌であ

ると考えられる。

そこで、W. Gams, "A key to the species of Mortierel la. "Persoonia 9,381-391,1977に準拠して既知のMort ierella属の種類と菌学的諸性質を比較すると、本菌株 はコロニーがビロード状でない、培養菌糸がニンニクに 類似した臭いを発する、胞子のう柄が長さ87.5-320μ mで分岐は下部でのみ生じ、葡萄の房状に分岐しない、 胞子のうは内部に多数の胞子のう胞子を含む、というこ とからMortierella属Mortierella亚属 (Sugem. Morti-c rella) Hygrophila節 (Sect. Hygrophila) に含まれると 考えられる。Hygrophila節には22種が含まれている。本 菌株とこれら22種と菌学的諸性質を比較すると、本菌株 はMortierella zychae, M. elongatula, およびM. elongata の3種に類似すると考えられる。そこで、K. II. Domsch, W. Gams, & T, -II. Anderson, "Compendium of Soll Fung i, "Academic Press, 1980、およびW. Gams, "Some new o f noteworthy species of Mortierella, "Persoonia 9, 111-140, 1976、およびG. Linnemann, "Mortierella Coe mans 1863. "H. Zycha&R. Siepmann. "Mucorales Eine Bes chreibung Aller Gattungen und Arten dieser Pilzgru 20 ppc. "pp. 155-241, J. Cramer, 1969を参考にして、本菌 株とこれら3種と菌学的諸性質を比較した。本菌体は、 M. zychaeとは胞子のう柄の長さと基部の幅、胞子のうの 大きさで、明瞭に異なる。M. elongaulaとは胞子のう胞 子の形態と大きさで、明瞭に異なる。M. clongataとは胞 子のう柄がやや短い、厚膜胞子の形態が楕円形または亜 球形で希に連鎖することがあり、さらに厚膜胞子がとき に数本の菌糸を周囲に出す、という点で異なるが、本発 明者らはこのような差異は本菌株をMortierella elonga taと別種であるとするには十分でないと判断した。そこ で、本発明者らは本菌株をMortierella elongata SAM 0219と同定した。SAM 0219株は昭和61年3月19日に通 商産業省工業技術院微生物工業技術研究所(FRI)に受 託番号 FERM BP-1239として寄託されている。 本発明に使用される菌株を培養する為には、その菌株の 胞子、菌糸又は予め培養して得られた前培養液を、液体 培地又は固体培地に接種し培養する。液体培地の場合 に、炭素源としてはグルコース、フラクトース、キシロ ース、サッカロース、マルトース、可溶性デンプン、糖 密、グリセロール、マンニトール等の一般的に使用され ているものがいずれも使用できるが、これらに限られる ものではない。窒素源としてはペプトン、酵母エキス、 **麦芽エキス、肉エキス、カザミノ酸、コーンステイブリ** カー等の天然窒素源の他に、尿素等の有機窒素源、なら びに研修ナトリウム、研修アンモニウム、研修アンモニ ウム等の無機窒素源を用いることができる。この他必要 に応じリン酸塩、硫酸マグネシウム、硫酸鉄、硫酸銅等 の無機塩及びビタミン等も微量栄養源とて使用できる。 これらの培地成分は微生物の生育を害しない濃度であれ

ば特に制限はない。実用上一般に、炭素源は0.1~30重

型%、好ましくは1~10重量%、窒素源は0.01~5重量%、好ましくは0.1~2重量%の濃度とするのが良い。 又、培養温度は5~40℃、好ましくは20~30℃とし、培地のpliは4~10、好ましくは6~9として、通気撹拌培養、振盪培養、又は静置培養を行なう。培養は通常2~10日間行う。

固体培地で培養する場合は、固形物重量に対して50~10 0重量%の水を加えたふすま、もみがら、来ぬか等を用 い、5~40℃、好ましくは20~30℃の温度において、3 ~14日間培養を行う。この場合に必要に応じて培地中に 窒素源、無機塩類、微量栄養源を加えることができる。 アラキドン酸の生産量を増加せしめるためには、培地中 にヘキサデカンもしくはオクタデカンのごとき炭化水 素;オレイン酸もしくはリノール酸のごとき脂肪酸又は その塩、例えばナトリウム塩もしくはカリウム塩;又は オリーブ油、綿実油もしくはヤシ油のごとき油脂類を単 独で、又は組み合わせて存在せしめるのが好ましい。 こ れらの添加物は培養開始前の培地又は培養中の培養液に 添加することができる。これらの添加物は一度に添加す ることもでき、又は連続的に、もしくは複数回に分けて 経時的に添加することもできる。培養開始前においては 炭化水素、脂肪酸もしくはその塩、又は油脂類の添加が 好ましく、培養中においては脂肪酸もしくはその塩、又 は油脂類の添加が好ましい。

このように培養して、菌体内に、アラキドン酸を含有する脂質が生成蓄積される。液体培地を使用した場合には、培養菌体から、次のようにしてアラキドン酸の採取を行なう。

培養終了後、培養液より遠心分離及び遮過等の常用の間液分離手段により培養菌体を得る。菌体は十分水洗し、好ましくは乾燥する。乾燥菌体は、好ましくは窒素気流下で有機溶媒によって抽出処理する。有機溶媒としてはエーテル、ヘキサン、メタノール、エクノール、クロロボルム、ジクロロメタン、石油エーテル等を用いることができ、またメタノールと石油エーテルの交互抽出や、クロロボルムーメタノールー水の一層系の溶媒を用いた抽出によっても良好な結果を得ることができる。抽出物から減圧下で有機溶媒を留去することにより、高濃度のアラキドン酸を含有した脂質が得られる。

また、上記の方法に代えて湿菌体を用いて抽出を行うことができる。この場合にはメタノール、エタノール等の水に対して相溶性の溶媒、又はこれらと水及び/又は他の溶媒とから成る水に対して相溶性の混合溶媒を使用する。その他の手順は上記と同様である。

上記のようにして得られた脂質中には、アラキドン酸が 脂質化合物、例えば脂肪の構成成分として含まれてい る。これらを、直接分離することもできるが、低級アル コールとのエステル、例えばアラキドン酸メチルとして 分離するのが好ましい。このようなエステルにすること により、他の脂質成分から容易に分離することができ、 また、培養中に生成する他の脂肪酸、例えばパルミチン 酸、オレイン酸、リノール酸等(これらも、アラキドン 酸のエステル化に際してエステル化される)から容易に 分離することができる。例えば、アラキドン酸のメチル エステルを得るには、前記の抽出脂質を無水メタノール -塩酸5%~10%、BF3-メタノール10%~50%等によ り、室温にて1~24時間処理するのが好ましい。

前記の処理液からアラキドン酸メチルエステルを回収す るにはヘキサン、エーテル、酢酸エチル等の有機溶剤で 10 抽出するのが好ましい。次に、この抽出液を無水硫酸ナ トリウム等により乾燥し、有機溶媒を好ましくは減圧下 で留去することにより主として脂肪酸エステルから成る 混合物が得られる。この混合物中には、目的とするアラ キドン酸メチルエステルの他に、パルミチン酸メチルエ ステル、ステアリン酸メチルエステル、オレイン酸メチ ルエステル等が含まれている。これらの脂肪酸メチルエ ステル混合物からアラキドン酸メチルエステルを単離す るには、カラムクロマトグラフィー、低温結晶化法、尿 とができる。

こうして単離されたアラキドン酸メチルからアラキドン 酸を得るには、アルカリで加水分解した後、エーテル、 酢酸エチル等の有機溶媒で抽出すればよい。

また、アラキドン酸をそのメチルエステルを経ないで採 取するには、前記の抽出脂質をアルカリ分解(例えば5 %水酸化ナトリウムにより室温にて2~3時間)した 後、この分液から、脂肪酸の抽出・精製に常用されてい る方法により抽出・精製することができる。

次に、実施例により、この発明をさらに具体的に説明す。30 る。

実施例1.

グルコース5%、ペプトン0.5%、酵母エキス0.3%及び 表芽エキス0.3%を含む培地(pH6.0)50mlを500ml容坂 ロフラスコに入れ、120℃で20分間殺菌した。モルティ エレラ・エロンガタSAM 0219 (FERM BP-1239) 1 白金 耳を接種し、レシプロシェーカー (110rpm) により28℃ で5日間振盪培養した。培養後、濾過にて菌体を回収 し、十分水洗した後、凍結乾燥した。これにより、1.3g の乾燥菌体を得た。この菌体より、クロロホルムーメター ノールー水の一層系の溶媒を用いるBligh & Dyerの抽 出法によって総脂質を抽出したところ、320mgの脂質が 得られた。この脂質を無水メタノールー塩酸(95:5)を 川いて20℃にて3時間処理してアラキドン酸のメチルエ ステル化を行なった。これをエーテルで抽出して200mg の脂肪酸メチルを得た。この脂肪酸メチルの組成はガス クロマトグラフィーによる分析で、パルミチン酸メチル 9%、ステアリン酸メチル2%、オレイン酸メチル32 %、リノール酸メチル9%、y-リノレン酸メチル10 %、アラキドン酸メチル20%、その他17%であることが 50

認められた。この混合脂肪酸メチルをカラムクロマトグ ラフィーによって分離し、アラキドン酸メチル画分を分 取し、ロータリーエバポレーターによって溶媒を留去し た結果、25mgの精製されたアラキドン酸メチルを得た。 本標品と市販のアラキドン酸メチル標準サンプルについ て、ガスクロマトグラフィー分析、高速液体クロマトグ

ラフィー分析及び質量分析によって比較を行なったとこ ろ、両者は、いずれの分析においても一致した。精製前 及び精製後の「アラキドン酸メチル」量は培地当り、そ れぞれ0.84mg/ml、0.50mg/ml, 乾燥菌体当り、それぞれ3

2mg/g、19mg/gであった。

実施例2

実施例1と同じ組成の培地50を150ジャーファーメン ターに仕込み、120℃で40分間殺菌後、モルティエレラ ・エロンガタSAM 0129 (FERM EP-1239) の前培養液2 00mlを接種した。30℃、通気量0.5v. v. m. で3日間通気 撹拌培養を行ない、得られた湿菌体360g(乾燥重量110 g) について、実施例1と同様に抽出、加水分解、メチ ルエステル化を行なったところ、総脂質29g、混合脂肪 素包接体法等を、単独で、又は組み合わせて使用するこ 20 酸メチル18gを得た。このものの組成は、パルミチン酸 メチル8%、スチアリン酸メチル1%、オレイン酸メチ ル29%、リノール酸メチル12%、γ-リノレン酸メチル 11%、アラキドン酸メチル22%、その他17%であること が認められた。アラキドン酸メチルの生成量は培地当 り、0.79g/ l 、乾燥菌体当り36mg/gであった。

> 又、培養終了後、濾過によって得られた培養濾液4,350m 1を乾燥後、実施例1と同様に抽出、加水分解、メチル エステル化を行なったところ、25%のアラキドン酸メチ ルを含む混合脂肪酸メチル156mgを得た。

実施例3

モルティエレラ エキシグア (Mortierella exigua, IFO 8571)、及びモルティエレラ ヒグロフィラMortiere Ha hygrophila, IFO 5941) について実施例 L と同様な 操作を行なったところ、それぞれ72mg、95mgの脂肪酸メ チルを得た。

これらの脂肪酸メチル中に含まれるアラキドン酸メチル を単離・精製したところ、それぞれ12mg、及び20mgであ った。

実施例4

グルコース2%、酵母エキス1%、Tween 20 0.2%、及 び種々の炭化水素、脂肪酸ナトリウム、又は油脂0.5% を含む培地 (pl16.0) 20mlを100ml容マイヤーに入れ、12 0℃で20分間殺菌した。モルティエレラ・エロンガタ S AM 0129 (FERM BP-1239) 1 自金耳を接種し、ロータ リーシェーカー (200rpm) により28℃で5日間培養し た。得られた菌体について、実施例1と同様に抽出、加 水分解、及びメチルエステル化を行なった。培地に添加 した種々の炭化水素、脂肪酸ナトリウム、及び油脂それ ぞれについて、得られた乾燥菌体重量、総脂質量、総脂 肪酸メチル量、アラキドン酸メチル含量、及び培地当り

10

のアラキドン酸メチル生成量は下表のようになった。

添加物	乾萬重重	総脂質量	総肪メルロの	アラキ が が か ま量 第 こ	アラキド ン酸の培 地当り生 成量 [mg/ml]
オクタデカン	330	95	88	20	0, 88
オレイン酸ナト リウム	290	81	64	25	0, 80
リノール酸ナト リウム	300	96	83	19	0, 79
オリーブ油	430	130	113	24	1,36
綿実油	420	118	97	23	1.12
ヤシ油	380	98	7 8	25	0.98
無添加	300	85	68	22	0.75

頻準培地に炭化水素、脂肪酸、油脂類などを添加することにより、対照無添加区よりも、アラキドン酸生成量は10~80%上昇した。

実施例5

グルコース 2 %、及び酵母エキス 1 %を含む培地 (pH6. 0) 20mlを100ml容マイヤーに入れ、120℃で20分間殺菌した。モルティエレラ・エロンガタ SAM 0219 (FERM BP-1239) 1 白金耳を接種し、ロータリーシェーカー (200rpm) により28℃で4日間培養後、種々の脂肪酸ナトリウム又は油脂100mgを120℃で15分間殺菌後、添加し、さらに同様にして2日間培養し。得られた菌体につ

いて、実施例1と同様に抽出、加水分解、及びメチルエステル化を行なった。培地に添加した種々の、脂肪酸ナトリウム、及び油脂それぞれについて、得られた乾燥菌体当り、及び培地当りのアラキドン酸メチル生成量は下表のようになった。

is toud to	アラキドン酸			
添加物	[mg/g	ng/nl)		
オレイン酸ナトリウム	46	0,79		
リノール酸ナトリウム	47	0.80		
リノレン酸ナトリウム	54	0.76		
オリーブ油	44	0,96		
大豆油	53	1.12		
アマニ油	48	0.95		
無添加	49	0.74		

培養途中(培養4日後)に、脂肪酸、油脂類などを添加することにより、対照無添加区よりも、アラキドン酸生成量は10~60%上昇した。